



# Shelleyと アイルランド問題

## ● 本田和也

アイルランドにかねて関心を抱いていた Shelleyは、1812年、若い妻Harrietとアイルランドへ向って、用意してあった小冊子をアイルランド人たちに配布した。Shelleyはその小冊子でアイルランド人のカトリック解放運動に理解と同情を示しつつも、いっそうの自制を呼びかけ、その解放運動は、もっと賢明に、冷静に、知性と思考を利して行うべきだと説いている。そして、プロテスタントとカトリックの歴史的対立や抗争がどのようなものであったかを説明し、宗教が究極には人々を善に導くことであるのに、現実はその宗教理念からほど遠いことを明かすのである。小冊子は自由の意味、信教の自由、非暴力、耐えることの意味、理性を説き、アイルランドの現状をよく認識し、そこを突破口に世界のあるべき理想像まで語っている。彼はアイルランド人の結社に対しては、武器を隠し置いたり、秘密のうちに会合したり、計画したり、無理に英国とアイルランドを分離させようとするのは悪であるというのである。フランス革命は暴力を導入したので民衆にとって良い結果にはならなかったと述べている。“sobriety,” “regularity,” “thought,” “reason,” “temperance,” “charity,” “independence”をアイルランド人に求めた。

Shelley がアイルランド問題を自らの信条とした自由の問題と同じように考えていたことは興味ある点であるが、アイルランド人に説いた言葉は率直にいて彼の理想主義の肌

合いの濃いプロテストであって、現実の状況を正確に言い表わしているとはいいい切れない。Shelleyは悪徳と愚かさを戒めさせ、節撰につとめるように働きかけ、不誠実な現実に心せよというのである。アイルランドの現実がいかに悪に満ち、人々は裏切りという政治的行為に慣れてしまい、頹廢と惨めな状況にいるかを示す。このことは雄弁に Joyceの*Dubliners*の動機である「ダブリンの頹廢と無気力」を語っていると思われてならない。Shelleyの目を捉えた頹廢、無気力、失意、怒り、と寸分違わぬ解答がJoyceの*Dubliners*の背景にあり、またそれらが作品の核をなしてさえいる。ホプキンスにとってアイルランド問題に絡んだ現実はずっととげとげしいものであったに違いない。JoyceはShelleyが示したアイルランドの歴史的・政治的現実をそれからほぼ90年あとになって自覚することになった。それはJoyceの*Dubliners*の中の“The Dead”が象徴的に語っている所である。“The Dead”の終末のGabrielの眠りに接するとき、*Ulysses*のMr. Bloomの創造が想起される。Mr. BloomはJoyceが創造しようとした新生アイルランドの人物であるといえる。Bloomと彼の妻Marion Bloomとの関係、Mrs. BloomとBlazes Boylanとの関係を見ると、“The Dead”のGabrielとその妻Grettaとの関係、Grettaと昔の恋人Michael Furyとのそれとは異なっていると気付く。GabrielはGrettaの告白に仰天し、狼狽し、自制心を

失なっている。彼を襲った危機は眠りの中で  
どうやら乗り切れそうなのだ。それに反し  
て、Bloomは妻の不貞には無頓着である。  
Bloomの無抵抗、非暴力で、受動的性格は、  
顔を赤らめ、嫉妬をあらわにするGabrielと  
比較すれば、はるかに異なった性格である。  
JoyceはGabrielが雪のなかに新生アイルラ  
ンドの幻想を抱くのを期待していたに違いない。  
自己意識過剰ともいえる嫉妬の病理はGabri  
elには避け難いものである。それはGrettaに  
自分の愛が裏切られたと感じたとき、もっと  
もあらわになる。しかしBloomの世界は率直  
であっけらかんとしたもので人間不信の在り  
ようから遠く離れている。Marion Bloomが

*Ulysses* の最後の挿話“Penelope”で見たあ  
の眠りのおおらかさは雪に埋れて行く死者た  
ちの眠りと質が違う。

Joyceの嫉妬の病理が克明に記されている  
のは、Nora Barnacle宛の、つまり彼の妻  
宛の手紙であるが、この病理こそアイルラ  
ンドの歴史そのものに関わっているという説さ  
えある。Joyceの、不誠実、裏切り、嫉妬か  
らなる自己意識の過敏さは、彼の作品の欠か  
せないモチーフであるが、その心理は実に  
アイルランドの歴史、政治、宗教と切り離せ  
ては考えられないというのは、卓見であろう。  
〔英語英文学（文教大学英語英文学会）

第14号より〕